

松村 明
山口明穂
和田利政
编

日本国語辞典

世界图书出版公司

日本国語辞典

松村 明
山口 明穂
和田 利政
编



世界图书出版公司

北京·广州·上海·西安

R/H/356/5

082494

说 明

本辞典经日本株式会社旺文社正式授权，由我公司在
中国大陆重印发行。版权所有，盗版必究。受版本限制，原
书中某些国名、地名、人名等专用术语及科技用语与我们
现行采用的有所不同，某些提法系原著作观点，不代表我
们的立场，请读者阅读使用时认真分析鉴别。书中凡差错
及谬误之处，欢迎读者批评。

广东世界图书出版公司

© 松村 明 他 1992

日本国语辞典

(原名《旺文社国语辞典》)

松村 明 山口明穗 和田利政 编

株式会社旺文社(日本)

出版

广东世界图书出版公司

广东世界图书出版公司发行

广州市新港西路大江冲 25 号

邮政编码:510300

东莞新丰印刷有限公司印刷

1996 年 12 月第 1 版 开本 787×1092 1/32

1996 年 12 月第 1 次印刷 印张:46

印数:0001-5000 册 字数:4480 千

ISBN 7-5062-3030-5/H·0055

版权贸易合同登记号 19-1996-040

出版社注册号:粤 014

定价:80.00 元

くぎり符号の種類

(名称は現在最も普通に用いられているものを掲げた)

符号	名称	使い方または例
。	句マ点	文の終止
、	読点	語句のくぎり
・	ナカテ	単語の並列の間
「」	カギ引用符号	村話・引用文
「」	二重カギ	カギの中のカギ
”	ノノカギ	カギの代わり
()	パルレ	注釈的語句
()	二重パルレ	(注意)
()	ヤマバ	(参考)

符号	名称	使い方または例
()	カクキツコ	(備考)
[]	二重カクキツコ	(五)
【 】	すみ付きパーレ	(例題)
?	疑問符	疑問・疑問のこ
!	感嘆符	感動・強の口調
・	ピリオド	止符・字文の終
,	コンマ	語句のくぎり
:	コロ	単語の並列の間
;	セミコロ	単語の並列の間

(ピリオド以下は主として横書きに用いる)

くり返し符号の種類

くり返し符号は、「タ」以外はできるだけ使わないようにするのが望ましい

符号	名称	例
ゝ	ひらがな返し	ちっ・は
ゝ	かな返し	ぱ、
く	大返し くの字点	散りよく
々	漢字返し 同の字点	日々・我々
ゝ	ピリの字点	草つつ各て
”	同ノ点	△案に賛成 △案”

※用い方・例ともに代表的なもののみを掲げた。くわしくは付録「国語表記の基準(三)(四)」参照。

(数字はページを示す)

	ア段	イ段	ウ段	エ段	オ段
ア行	あ 13	い 57	う 101	え 125	お 142
カ行	か 185	き 276	く 341	け 372	こ 407
サ行	さ 477	し 520	す 665	せ 691	そ 734
タ行	た 763	ち 816	つ 848	て 870	と 901
ナ行	な 951	に 974	ぬ 991	ね 994	の 1003
ハ行	は 1013	ひ 1069	ふ 1109	へ 1157	ほ 1173
マ行	ま 1209	み 1230	む 1249	め 1260	も 1271
ヤ行	や 1288	(い) 1304	ゆ 1304	(え) 1318	よ 1318
ラ行	ら 1338	り 1346	る 1366	れ 1368	ろ 1378
ワ行	わ 1388	ゐ 1399	(う) 1400	ゑ 1400	を 1400
ん	1400				

【濁音・半濁音】

	ア段	イ段	ウ段	エ段	オ段
ア行					
カ行	が	ぎ	ぐ	げ	ご
サ行	ざ	じ	ず	ぜ	ぞ
タ行	だ	ぢ	づ	で	ど
ナ行					
ハ行	ば	び	ぶ	べ	ぼ
マ行					
ヤ行	び	び	び	び	び
ラ行	り	り	り	り	り
ワ行					

【拗音】

	ア段	ウ段	オ段
ア行			
カ行	きゃ	きゅ	きょ
サ行	しゃ	しゅ	しょ
タ行	ちゃ	ちゅ	ちよ
ナ行	にゃ	にゅ	にょ
ハ行	ひゃ	ひゅ	ひょ
マ行	みゃ	みゅ	みょ
ヤ行	りゃ	りゅ	りょ
ワ行			

編者のことば

我々が平和な社会生活を営むには、ともに生活する人達との相互理解がなければならぬ。人が理解し合う最良の伝達手段は言葉であり、その意味で言葉の持つ価値は高い。言葉を知り、日常の生活で、できるだけ正しく、よい言葉を使うことの求められるゆえんである。

日常の生活の中で、言葉を意識する機会は多くはないに違いない。親しい人との間では意思の疎通に不足を感じる事が少ないからである。しかし、生活の場が広がるにつれ、互いに気心を知らない人と交際する機会も生じ、それまでの生活の延長では、意思の誤解から思わぬ摩擦が生まれることがある。相互の理解のために、正しく、行き届いた言葉を使う努力が必要になる。どのような言い方が正しく、行き届いたものであるかの理解が必要になる。

誰でもがよく理解している内容を、言葉で表し、相手に伝えることは難しくない。しかし、自分の創造した思想を誰にでも分かるような言葉で表すことは難しい。自分の創造的な営みを多くの人に理解してもらうために、正しく、行き届いた表現ができるよう、言葉の理解が必要なのである。正しい言葉遣いは、言語経験の豊富な積み重ねによって得られるものであるが、そこに我々を導く一つの手段が辞典である。その求めに応えられるよう、本辞典を編集した。

近時、わが国の国際化が叫ばれている。国際化は文化の根源につながる言葉の問題に最も大きな形でつながる。言葉の国際化には、いくつかの面がある。一つには、我々、国語を母国語とする者が、思考形成の基である国語を理解し、それによって自らを知る。それが、自己のアイデンティティの確立につながる。今後、国際舞台に生きる時に、強く求められるものである。さらに、他の面では、海外諸国の人達からの国語への関心は年をおって高まって来ているが、その人達からの、使いやすく、内容の優れた国語辞典への要求が強くなっている。この二

つの要求は、一見矛盾するようにも見えるが、我々の思考形成の独自さを説くことが、諸外国の人達の真の日本語理解につながることを考えると、決して相反するものでないことが分かるのである。本辞典はそれも構想している。

本辞典は、一九六〇年に誕生し、以後、数度の改訂により、内容を密にして来た。今回の改訂は、進歩の早い時代の要求も配慮した。しかし、いたずらに新しさを求めるだけでなく、過去の積み重ねをも大事にした。国語が、我々の文化であり続けて来たことを考え、国語のこれまでの歩みを理解することが大事であると考えたからである。本辞典を使用される読者は、国語の伝統の豊かさと時代の新しい息吹とを感じられるに違いない。本辞典を世に送り出したことは、本辞典の編集に携わった者の大きな喜びである。

なお、青木一男・安西廸夫・飯田満寿男・中村幸弘・森昇一の各氏には今回も編集委員として協力を賜った。このうち、森昇一氏が完成を見ずに亡くなられ、今日の喜びを分かち合えなかったことは残念である。また、執筆・校正等に多大のお骨折りをいただいた左記の方々に心よりお礼を申し上げる次第である。

〔執筆協力者〕秋元健一・秋山和男・阿久沢登美子・安孫子友行・新船孝・五十嵐一郎・石井正己・一色明・岩下裕一・岩本伸一・大野邦男・加島直吉・柏原司郎・北地節夫・久間竜太郎・小菅俊夫・坂田敏文・佐藤喜一・佐藤芳恵・島田耕治・清水勝太郎・庄司憲仁・城山正幸・千葉豊・塚越和夫・中嶋昭・成清良孝・新見公康・西井邦紀・橋本健一・花輪茂道・星野謙一郎・三根直美・矢口忠・山崎裕二・山本伸二・和田強・渡井博巳

〔口絵指導（日本の伝統色）〕北畠耀

〔図版作成〕香取良夫

（敬称略 五十音順）

一九九二年 初秋

編 者

この辞典のきまりと使い方

〔一〕 見出し語の範囲

この辞典は、国語の学習および日常の言語生活に役立つように作られたものである。見出し項目として掲げたものは、その目的にかなうよう、現代の日本語を中心とし、主要な外来語、百科語、古語、固有名詞（人名・地名・作品名など）、慣用語、ことわざ、故事成語、著名な和歌・俳句、および二五〇〇余の一字の漢字である。

〔二〕 見出し語

(1) 原則として、昭和六十一年改定の現代仮名遣いにより、平仮名の太字で表記した。ただし、

① 外来語は片仮名で表記した。

② 古語・和歌・俳句は歴史的仮名遣いで表記したが、古語・現代語にわたるものは現代仮名遣いで見出しを表記した。

例 いちかえふ「答ふ・応ふ」が、(自下二) (古) ことえる。

たちかえふ「立(ち)返る」が、(自五) (古) (た

ち)は接頭語①かえる。もどる。「原点に―」②引き返す。③(古)くりかえす。

(2) 一字の漢字(大活字)のものは、字音を見出しとした。

(3) 見出し語を構成する要素を「」で区切り、その構成を明らかにした。ただし、

① 複合語・連語などは原則として最終の意味のまとまりで区切った。

② 固有名詞・枕詞は原則として区切らなかった。

例 みや「宮」

みやづかえ「宮仕え」

じゆう「自由」

じゆうしぎ「自由主義」

いてもたってもいられない「居ても立ってもいられない」

なつめそうせき「夏目漱石」

(4) 活用語は原則として終止形を掲げ、語幹と語尾の区別を「・」で示した。形容動詞は語幹を掲げた。

例 あそぶ「遊ぶ」

おたやか「穏やか」

(5) 和歌・俳句は、第一句めを平仮名で見出しとした。

例 ひさかたの「和歌」(久方の 光のどけき……)

(6) 三字以上の見出し語(漢字一字の字音語の場合は除く)に、他の語がついてできた複合語は、その見出し語のあとに一括して掲げ、親見出しにあたる部分は「―」で掲げた。これらはそれぞれ行を改めて掲げた。ただし、検索の便宜上、この形式をとらず、独立見出しとしたものもある。

例 こうとう「高等」……

―がっこう「―学校」……

(7) ある見出し語に、他の語句がついてできた慣用連語・ことわざ・格言などは、その見出し語との重複部分に「―」を用い、漢字仮名交じり・太字で表記し、漢字にはその読みを示した。冒頭部分が活用語で、見出し語と語形が異なる場合は「―」を用いず、全形を掲げた。これらは行を改めず追い込みで掲げた。

この辞典のきまりと使い方

例 あいそ【愛想】

——が尽き…… —も小想も尽き果てる……

あたる【当(た)る】

あたって砕ける……

検索の便宜上、独立見出しで掲げたものもある。

例 いわぬがはな【言わぬが花】

(8)接頭語には見出しの下に、接尾語には上に「」を付けた。

例 うち【打ち】

たち【達】

【三】 見出し語の配列

見出し語は、つぎの順序によって配列した。

(1)五十音順

(2)清音・濁音・半濁音の順

例 はは【母】 はは【幅・巾】 ばば【婆】

パパ【papa】

(3)直音・促音・拗音の順

例 てつき【手付き】 きよう【器用】

てつき【鉄器】 きよう【今日】

(4)外来語の長音「ー」は、「ー」の前の仮名の母音に相当するものとみなして配列した。例えば、カーテンはカア・テン、チーズはチ・イズ、プールはプ・ウル、ケーキはケ・エキ、クロースはクロ・オスとみなすなど。

(5)つづりが同じ場合は、原則としてつぎの順に配列した。

(ア)①一字の漢字(大活字) ②接頭語・接尾語 ③単語 ④連語

⑤和歌・俳句の第一句め の順

(イ)単語は、品詞に基づき、その下位区分を含めてつぎの順とした。

①普通名詞 ②固有名詞 ③代名詞 ④自動詞 ⑤他動詞 ⑥

(四)

補助動詞 ⑦形容詞 ⑧形容動詞 ⑨連体詞 ⑩副詞 ⑪接続

詞 ⑫感動詞 ⑬格助詞 ⑭接統助詞 ⑮係助詞 ⑯副助詞

⑰終助詞 ⑱間投助詞 ⑲助動詞 の順

(ウ)右の中は、①見出し漢字のあるもの—漢字数の少ないもの、同じ字数では画数の少ないもの ②見出し漢字のないもの の順とする。

【四】 見出し語の書き表し方

(1)見出し語の書き表し方を「」の中に示した。固有名詞は「」の中に示した。仮名は、原則として平仮名を用い、現代仮名遣いで示したが、見出し語が古語の場合は、歴史的仮名遣いで示した。

(2)「常用漢字表」にある漢字の字体は、「常用漢字表」に従った。

(3)送り仮名は昭和四十八年内閣告示「送り仮名の付け方」に従った。

送り仮名をばくことの許可される語は、つぎのように示した。

(一)に包まれているものは、はぶいてよいことを表す。

例 とら・える【捕(ら)える・捉える】

うり・あげ【売(り)上げ・売上】

送り仮名をばくのが本則の場合は許可を(一)に包んだ。

例 おこなう【行(う)う・行なう】

(4)「」の中の漢字につぎの記号をつけて漢字の種別を示した。ただし、固有名詞、中国語・朝鮮語などにはこの記号をばふいた。

「常用漢字表」にない字

「常用漢字表」にあるが、その音または訓が掲げられていない読み

「常用漢字表」の「付表」に示されているもの以外のあ

て字・熟字訓

(5)外来語の原語つづりはへの中を示し、英語を除いて、該当す

る国語名を示した。

【例】カプセル〈カプセル〉 キョーザ〈中国餃子〉

(6) 英語のつづりは、米英両式がある場合は、原則として米式とし、また、いわゆる和製英語にはその表示をした。

【例】ユーモア〈humor〉

イジー・オーター〈和製英語〉

〔五〕 歴史的仮名遣い

(1) 見出し語の表記形「」の下に歴史的仮名遣いを片仮名で示した。
(2) 見出しが歴史的仮名遣いで表された古語には、現代仮名遣いを平仮名で示した。

(3) 見出しの仮名遣いと一致する部分は、語構成単位にしたがって省略し、「」で示した。

【例】けいこう【傾向】が ゆふづくよ【夕月夜】は

〔六〕 品詞および活用

(1) 見出し語には、品詞および活用の型を()に包み、略語で示した。ただし、名詞だけの場合や、故事・ことわざ・連語はその注記を省略した。

(2) 品詞の分類および活用の種類については、基本的には現行の学校教科書の一般的なものに従った。ただし、一部のものについては、さらにくわしくつぎの形式によった。

(ア) 名詞のうち、代名詞は(代)として区別した。

(イ) 名詞のうち、サ変動詞および形容動詞の語幹となるものは、品詞名とそれぞれの場合の終止形語尾を併記した。

【例】めい・き【明記】(名・他スル)

あし・はや【足早・足速】(名・形動タ)

この辞典のきまりと使い方

(ウ) 動詞は、自動詞・他動詞・補助動詞の区別を示した。

(エ) 助詞はつぎの六分類に従い、それぞれ略語で示した。

格助詞・接続助詞・係助詞・副助詞・終助詞・間投助詞

(3) 口語の動詞・形容詞・形容動詞・助動詞、および文語の助動詞には各活用形を示した。

(ア) 未然形・連用形・終止形・連体形・仮定形(已然形)・命令形の順に「・」で区切った。

(イ) 一つの活用段に二つ以上の形がある場合には、一方を()で包み、活用形のない段には「」を入れた。

【例】ただし、【正しい】(形)ただしい

(ウ) 名詞とサ変動詞、名詞と形容動詞のように二つ以上の品詞に属するものは、活用形を省略した。

(4) 助動詞は、(助動+下一型)のように、活用の型を示した。

(5) 文語でフリ活用形容動詞の語幹とされるものは、口語では、「と」をつけて副詞、「たる」をつけて連体詞として用いるのが普通なので、これを(か)として示した。

【例】どう・どう【堂堂】(名)

〔七〕 語釈・解説、および用例

(1) 古語・俗語・方言・枕詞などの語の種類、百科語の区分は、それぞれ略語を用いて示した。

(2) 語釈・解説は、その語の基本的な意味を明らかにし、また現代語としての意味・用法をできるだけもらさないようにした。

(3) 一つの見出し語に二つ以上の意味があるときは、①②③…を用いて分け、さらに細分するときは、㉠㉡…を用いて分けた。また、品詞が異なると意味も異なるときや、動詞で自動詞・他動詞・補助動詞があり、意味が異なるときは、㉠㉡…を用いて分けた。

(五)

(4) 語釈・解説では、補足的説明、例えば原義、見出し語の漢字の字義に即した説明などをできるだけ(一)に包んで加えた。

(5) 見出し語が口語の動詞、形容詞、形容動詞の場合には、語釈・解説のあとにその語と関係の深い語を掲げた。

(例) 見出し語が動詞(複合動詞は除く)の場合

① 他動詞に対する自動詞と、その活用型。自動詞に対する他動詞と、その活用型。また、見出し語の文語の語形と活用型。

(例) つら・ねる【連ねる・列ねる】(他下一)……………

……………自つらなる(五) 文つら・ぬ(下一)

② 可能動詞(五段活用動詞が下一段に活用して可能の意をもつ動詞)

(例) うごく【動く】(自五)……………

……………他うごか・す(五) 可能うごける(自下一)

(例) 見出し語が形容詞・形容動詞の場合

文語の語形と、その活用型。

(例) うつくしい【美しい】(形)……………文うつく・し(シク)

しずか【静か】サ(形動ダ)……………文(ナリ)

(6) 対義語・対応語をつぎの形式で示した。

(例) あつ・い【暑い】……………↑寒い

対義語・対応語が、①②…で区分されたいくつかの語義に通用する場合、それらの語釈のあとに(一)に包んで示した。

(例) おも・い【重い】(形)イロ・カサ・シロ。①重量が多い。おもたい。

……………「荷物が一」②大切だ。重要だ。「一任務」③悪い程度がはなはだしい。ひどい。「病気が一」……………(↑軽い)

(7) 意味の理解を助けるため、用例をつぎの要領で示した。

(例) 現代語の用例は現代仮名遣い、古語の用例は歴史的仮名遣いで示した。古語の用例には原則として出典を示した。出典名は、

〈源氏〉〈更級〉〈古今〉などのように略称で示した。

(例) 用例中の見出し語にあたる部分は「一」で示した。動詞・形容詞などで、見出し語と語形が異なる場合には、語幹を「一」で示し、その下に語尾を仮名で書いて示した。

(例) いたい【痛い】(形)イタ・タ・シ。①……………「足が一」②

……………「チャンス逃がしたのは一・かった」

(例) 語幹・語尾の区別のない動詞や、助動詞で見出し語と語形が異なる場合は、これを太字で示した。

(例) みる【見る】(他上一)ミ・ミ・ミ……………「みれば一ほど美しい」

せる(助動下一型)セ・セ・セ……………①……………「使いに行か一」②……………「病気のため、休ませていただく」

〔八〕 一字の漢字

(1) 「常用漢字表」にある漢字、人名用漢字、およびそれ以外で一般社会生活に用いられることの多い漢字、総数二五〇〇余字を収めてその字義を解説した。

(2) 見出し漢字の字音を見出しとした。「常用漢字表」に字音が二つ以上掲げられている場合は、原則としてそのすべてを見出しとして掲げたが、字義解説は、より一般的と思われる字音の項に示した。

(3) 字体

(例) 他の項目より大きい活字で「一」の中に漢字を示した。

(例) 「常用漢字表」にある漢字の字体は「常用漢字表」に、人名用漢字は「人名用漢字別表」に従った。

(例) 「常用漢字表」にある漢字で、新字体と旧字体との両方のある漢字は、新字体の下にやや小さい字で旧字体を掲げた。人名用

漢字で旧字体のあるものは人名用漢字の字体の下に掲げた。

(エ)「常用漢字表」にない漢字には「一般項目と同じ」を、人名用漢字には「人」をつけた。

(4) 音訓

(ア) 字音を片仮名で、字訓を平仮名で示した。

(イ) ①「常用漢字表」にある漢字については、「常用漢字表」に掲げられている音訓は太字で示した。ただし、字訓については送り仮名の部分は細字で示した。また、「常用漢字表」には掲げられていない音訓も、一般によく使われる代表的なものは細字で示した。②「常用漢字表」にない漢字の音訓は細字で示した。

③ 字音には歴史的仮名遣いを添えた。

(5) 筆順 常用漢字・人名用漢字にはすべて筆順を示した。

(6) 字義、その他

(ア) 熟語を構成する成分としての字義をもれなく掲げ、各字義についての用例を「」に示した。

(イ) 字義解説のあとに、その漢字が特殊な読み方の熟語となる場合「難読」としてその例を示した。さらに、その漢字が人名として用いられる場合の読み(名乗り)を実際例にもとづいて「人名」の下に示した。また、「参考」には補足事項を示した。

(ウ) 同じ意で使われる漢字をⅡで示した。

〔九〕「類語」「表現」「敬語」「用法」「語源」「参考」欄

見出し語の理解をいっそう深め、合わせて表現に役立たせるために、語釈・解説のほかに、つぎの欄を設けて多角的な解説を施した。

(1) 見出し語の、同意語・類義語などを示した。

(2) 見出し語とともによく用いられる、慣用表現、擬声語・擬態語を示した。

この辞典のきまりと使い方

(3)「敬語」 見出し語の敬語表現で、日常生活によく用いられ、対照的に使い分けられる「敬語」を、相手側・自分側に分けて表組みで示した。

(4)「用法」 見出し語の日常生活での使い方に関する事項を解説した。

(5)「語源」 見出し語の成立過程、一単語の構成を解説した。

(6)「参考」 見出し語の語釈・解説を別の角度からみた説明、類語・関連語との区別、その他見出し語に関係する事項を解説した。

〔十〕「使い分け」「故事」

日常よく使われる、まぎらわしい同音同訓異義語約一五〇組の使い分けを枠囲みで、故事約一七〇の解説を特別欄に収めた。

〔十一〕和歌・俳句、および俳句の季語

(1) 中学校、高等学校の国語教科書や参考書にあらわれる現代短歌・現代俳句を、その頻度数を基礎にして約一四〇を本文に採録した。古典関係の和歌は小倉百人一首に限った。

(2) 本文に採録した俳句には、句中の季語を注記した。

(3) 見出し語が俳句の季語となるものには、語釈・解説のあとに、**〔春夏秋冬〕**を付けて季を示した。季に異説のある場合、および親語から派生した語の季語は()に包んで示した。

〔十二〕口絵・付録

巻頭には国語学習に役だつように企画・作成されたカラー口絵を収めた。巻末付録には実用的な多くの記事を収めた。特に「漢字・難読語一覽」は読み方の難しいと思われる漢字(常用漢字・人名用漢字は除く)や熟語を選んで、その読みを漢字の画数で引けるようにした。

「使い分け」項目一覧

【あ】

あう(会う・遭う・遇う・逢う).....	七
あがる(上がる・騰がる・挙がる).....	三
あく(空く・開く).....	三
あた(値・価).....	三
あたたかい(温かい・暖かい).....	三
あつい(暑い・熱い).....	三
あてる(当てる・充てる).....	三
あと(後・跡).....	三
あぶら(油・脂・膏).....	三
あら(荒い・粗い).....	三
あらわす(表す・現す).....	三
ある(有る・在る).....	三
あわせる(合わせる・併せる).....	三
いし(意志・意思).....	三
いじょう(異状・異常).....	三
いたむ(痛む・傷む).....	三
いどう(移動・異同・異動).....	三
うける(受ける・請ける).....	三
うつ(打つ・討つ・撃つ).....	三
うつす(写す・映す).....	三
うむ(生む・産む).....	三
おかす(犯す・侵す・冒す).....	三
おくれる(遅れる・後れる).....	三
おこる(起こる・興る).....	三
おさえる(抑える・押さえる).....	三
おさまる(収まる・納まる).....	三

【か】

おす(押す・推す).....	三
おどる(踊る・躍る).....	三
おもて(表・面).....	三
おりる(下りる・降りる).....	三
かいてい(改定・改訂).....	三
かいう(回答・解答).....	三
かいほう(開放・解放).....	三
かえす(返す・帰す).....	三
かえりみる(省みる・顧みる).....	三
かえる(代える・替える・換える).....	三
かき(夏季・夏期).....	三
かける(掛ける・懸ける・架ける).....	三
かた(形・型).....	三
かたい(堅い・固い・硬い).....	三
かわく(乾く・渴く).....	三
かんしょう(觀賞・鑑賞).....	三
きかん(気運・機運).....	三
きかい(器械・機械).....	三
きく(利く・効く).....	三
きく(聞く・聴く).....	三
きじゅん(基準・規準).....	三
きせい(既成・既製).....	三
きてい(規定・規程).....	三
きてん(起点・基点).....	三
きようどう(共同・協同).....	三
きる(切る・伐る・斬る・截る).....	三
きわめる(究める・窮める・極める).....	三

【さ】

くら(倉・蔵・庫).....	三
ぐんしゅう(群衆・群集).....	三
こうい(好意・厚意).....	三
こえる(越える・超える).....	三
こたえる(応える・答える).....	三
さいけつ(採決・裁決).....	三
さいご(最後・最期).....	三
さがす(捜す・探す).....	三
さく(裂く・割く).....	三
さくせい(作成・作製).....	三
さげる(下げる・提げる).....	三
さす(刺す・指す・差す・挿す).....	三
じき(時期・時機).....	三
しこう(志向・指向).....	三
しずまる(静まる・鎮まる).....	三
じつじよう(実状・実情).....	三
じにん(自任・自認).....	三
しほる(絞る・搾る).....	三
しめる(絞める・締める).....	三
しゅうしゅう(収拾・収集).....	三
しゅうち(周知・衆知).....	三
しゅうりよう(修了・終了).....	三
しゅぎよう(修行・修業).....	三
しゅし(主旨・趣旨).....	三
じゅし(受章・受賞).....	三
しょうがく(小額・少額).....	三
しよくりよう(食料・食糧).....	三
しんにゅう(侵入・浸入).....	三
しんろ(針路・進路).....	三
すすめる(進める・勧める・薦める).....	三
せいいく(生育・成育).....	三
せいさく(制作・製作).....	三
せいさん(清算・精算).....	三
せいちょう(生長・成長).....	三
そう(沿う・添う).....	三

【た】

そくする(即する・則する).....	三
たいしゅう(対称・対象・対照).....	三
たいせい(体制・体勢・態勢).....	三
たいひ(待避・退避).....	三
たえる(耐える・堪える).....	三
たずねる(訪ねる・尋ねる).....	三
たたかう(戦う・闘う).....	三
たつ(断つ・絶つ).....	三
たてる(立てる・建てる).....	三
たんきゅう(探求・探究).....	三
ついきゅう(追及・追求・追究).....	三
つかう(使う・遣う).....	三
つく(付く・着く・就く).....	三
つくる(作る・造る).....	三
つしむ(慎む・謹む).....	三
つとめ(務め・勤め).....	三
つとめる(努める・務める).....	三
勤める.....	三
てきかく(的確・適確).....	三
どうし(同士・同志).....	三
とうとい(尊い・貴い).....	三
とが(科・咎).....	三
とくちよう(特長・特徴).....	三
とける(解ける・溶ける).....	三
ととのえる(整える・調える).....	三
とぶ(飛ぶ・跳ぶ).....	三
とる(取る・執る・採る・捕る).....	三
な.....	三
なおす(直す・治す).....	三
ながい(長い・永い).....	三
ならう(習う・倣う).....	三
のせる(乗せる・載せる).....	三
のばす(延ばす・伸ばす).....	三
のぼる(上る・登る・昇る).....	三

「表現」・「敬語」項目一覽

敬語

はかる(測る・量る・計る・図る・謀る・諮る)……………	〇五五
はじめ(初め・始め)……………	〇五三
はなれる(放れる・離れる)……………	〇四八
はやい(早い・速い)……………	〇五三
はんめん(半面・反面)……………	〇六八
ひく(引く・弾く)……………	〇七〇
ひしょう(微小・微少)……………	〇六八
ひょうき(表記・標記)……………	〇六〇
ひょうじ(表示・標示)……………	〇六〇
ふえる(増える・殖える)……………	〇二七
ふく(吹く・噴く)……………	〇三三
ふね(舟・船)……………	〇二九
ふよ(付与・賦与)……………	〇四四
ふよう(不用・不要)……………	〇四四
べつじよう(別状・別条)……………	〇五五
ほしょう(保証・保障)……………	〇二九
ほたい(母体・母胎)……………	〇二六
まじる(交じる・混じる)……………	〇二六
まるい(丸い・円い)……………	〇三三
まわり(回り・周り)……………	〇三七
もと(元・本・基・下)……………	〇三六
【や】	
やせい(野生・野性)……………	〇三五
やわらかい(柔らかい・軟らかい)……………	〇三三
よい(良い・善い・好い・佳い)……………	〇三九
ようけん(用件・要件)……………	〇三三
ようこう(要項・要綱)……………	〇三三
よむ(読む・詠む)……………	〇五五
【わ】	
わかれる(分かれる・別れる)……………	〇五九
わく(沸く・湧く)……………	〇五三
わざ(技・業)……………	〇五三
わずらう(患う・煩う)……………	〇六六

表現

【あ】	
あじ(味)……………	元
あめ(雨)……………	四〇
あるく(歩く)……………	五
いう(言う)……………	六
いたむ(痛む)……………	五
うれる(売れる)……………	五
おこる(怒る)……………	五九
おそれる(恐れる)……………	六四
おどろく(驚く)……………	六九
【か】	
かおり(香り)……………	〇五
かせ(風)……………	三六
かなしむ(悲しむ)……………	三六
かむ(噛む)……………	四七
かんがえる(考える)……………	六五
きく(聞く)……………	六五
きる(切る)……………	三三
けんか(喧嘩)……………	六八
【さ】	
さす(刺す)……………	四九
さわぐ(騒ぐ)……………	六九

すこす(越す)	六八
すすむ(進む)	六九
すわる(座る)	六九
【た】	
たおれる(倒れる)	七三
たつ(立つ)	七五
つかれる(疲れる)	八五
【な】	
ながれる(流れる)	九八
なく(泣く)	九八
にげる(逃げる)	九八
ぬれる(濡れる)	九四
ねむる(眠る)	〇〇
のむ(飲む)	〇二
【は】	
はたらく(働く)	〇七
はなす(話す)	〇四
ふく(吹く)	二二
ふくらむ(膨らむ)	二五
ふる(降る)	二六
ふるえる(震える)	二七
【ま】	
まつ(待つ)	三九
みる(見る)	四七
【や】	
ゆき(雪)	三三
【わ】	
わらう(笑う)	六六

あう(全う)……………	七
あに(兄)……………	元
あね(姉)……………	元
いう(言う)……………	六
いえ(家)……………	六
いけん(意見)……………	六六
いもうと(妹)……………	六
いる(居る)	五
おと(夫)……………	六六
おとうと(弟)……………	六七
きく(聞く)……………	六五
きる(着る)	六五
くる(来る)	六四
くれる(呉れる)	六六
こころざし(志)……………	四七
しよくじ(食事)……………	六九
する(為る)	六九
たずねる(訪ねる)	六九
たべる(食べる)	六三
ちち(父)……………	六三
つま(妻)……………	六四
てがみ(手紙)……………	六九
なまえ(名前)……………	六六
ねる(寝る)……………	〇一
はは(母)……………	〇四九
みせる(見せる)	三七
みる(見る)	四七
むすこ(息子)……………	三五
むすめ(娘)……………	三五
ゆく(行く)……………	三四

「類語」項目一覽

【あ】

扶謬 あやまち	四五	慌てる	五
愛する	一五	哀れ	五
会う	一七	安心	五
赤ん坊	一七	言う	六
秋	一七	憤り	六
明らか	一七	苛めめる	六
諦めめる	一七	遺跡	七
飽きる	一七	急ぎ	七
朝 あさ	一七	一生	八
朝飯 あさめし	一七	一生懸命	八
味	一七	いつも	八
与える	一七	命	八
頭	一七	祈る	八
暑さ	一七	今	九
侮める	一七	妹	九
兄	一七	苛い立つ	九
姉	一七	祝い	九
雨	一七	受け取る	九
あやふや	一七	失う	一〇
過ち	一七	嘘 うそ	一〇
謝る	一七	疑い	一〇
現れる	一七	うっかり	一〇
有りの儘 まま	一七	腕前	一〇
		奪う	一〇
		埋まる	一〇

生まれる	一七	敬う	一八
海	一八	熟れる	一八
敬う	一八	噂 うわさ	一八
永遠	一八	選ぶ	一八
選ぶ	一八	宴 うたげ	一八
宴 うたげ	一八	延期	一八
援助	一八	横柄	一八
横柄	一八	お金 おかね	一八
敵か	一八	行 い う	一八
怒る	一八	起 おこ る	一八
起 おこ る	一八	お爺 おや さん	一八
お爺 おや さん	一八	恐れる	一八
恐れる	一八	穏やか	一八
夫	一八	弟	一八
男	一八	驚く	一八
驚く	一八	お婆 おば さん	一八
お婆 おば さん	一八		

【か】

思い	一七	会	一八
思い出	一七	海岸	一八
疎 そ か	一八	解雇	一八
女	一八	買う	一八
		返す	一八
		顔 かほ 立ち	一八
		顔 かほ 立ち	一八
		書く	一八
		格別	一八
		風	一八
		勝ち	一八
		勝つ	一八
		勝手	一八
		必ず	一八
		金持ち	一八
		体	一八
		川岸	一八
		考える	一八
		記憶	一八
		聞く	一八
		傷	一八
		希望	一八
		休憩	一八
		去年	一八
		気楽	一八
		苦く	一八
		食い止める	一八

【さ】

食 く う	一七	最期	一八
口喧嘩 くちげんか	一七	逆様	一八
雲	一八	逆らう	一八
曇り	一八	先程	一八
来る	一八	咲く	一八
企てる	一八	酒飲み	一八
景色	一八	差し上げる	一八
結婚	一八	さすらう	一八
眨 ま りなす	一八		
喧嘩 けんか	一八		
交際	一八		
後退	一八		
声	一八		
志	一八		
今年	一八		
子供	一八		
拒む	一八		
媚 こ びる	一八		
拳 こぶし	一八		
堪 こ える	一八		
殺す	一八		
転ぶ	一八		
今夜	一八		

寒さ	五〇六
さようなら	五〇七
死	五〇三
幸せ	五〇四
しがみつく	五〇〇
式	五〇二
至急	五〇三
しくじる	五〇四
静か	五〇三
死体	五〇五
為達しげる	五〇七
死ぬ	五〇六
自分	五〇一
手段	五〇七
出発	五〇九
少女	五〇二
少年	五〇五
知らせ	五〇一
知る	五〇四
新人	五〇七
身長	五〇六
推薦	五〇九
推測	五〇七
優れる	五〇七
進む	五〇九
座る	五〇六
背	五〇四
成長	五〇三
背負う	五〇六
せつち	五〇三
接待	五〇四
先日	五〇五
僧	五〇六

葬式	五〇一
送別	五〇六
喰ひます	五〇四
どんざい	五〇二
【た】	
待遇	五〇三
大体	五〇五
大胆	五〇六
大便	五〇九
企み	五〇七
たけなわ	五〇八
多数	五〇六
訪ねる	五〇七
騙す	五〇三
黙る	五〇四
多様	五〇五
父	五〇三
治療	五〇九
直接	五〇三
追加	五〇八
疲れる	五〇三
月	五〇四
妻	五〇四
連れる	五〇六
丁寧	五〇七
手紙	五〇九
手柄	五〇九
出来上がる	五〇六
適当	五〇八
弟子	五〇三
手下	五〇三
当然	五〇三

時時	五〇三
突然	五〇三
友	五〇四
【な】	
なおざり	五〇四
治る	五〇五
眺め	五〇七
泣く	五〇九
殴る	五〇六
情け	五〇一
成し遂げる	五〇二
夏	五〇三
怠ける	五〇七
波	五〇八
波打ち際	五〇八
涙	五〇六
匂い	五〇七
臭い	五〇七
眠る	五〇〇
念入り	五〇三
年齢	五〇三
除く	五〇八
のんびり	五〇三
【は】	
葉	五〇四
励む	五〇〇
恥	五〇三
恥じらう	五〇四
走る	五〇四
肌	五〇六
裸	五〇六

話す	二〇四
母	二〇九
ばらばら	二〇五
春	二〇七
晴れ	二〇八
晩飯	二〇八
日頃	二〇九
引越	二〇五
病氣	二〇〇
昼	二〇五
昼飯	二〇六
貧乏	二〇九
服従	二〇三
無沙汰	二〇七
不断	二〇三
冬	二〇二
臍曲がり	二〇三
便所	二〇二
放蕩	二〇五
方法	二〇六
誇り	二〇三
寝める	二〇三
【ま】	
負け	二〇四
負ける	二〇五
真心	二〇五
守り	二〇四
身籠もる	二〇三
見る	二〇七
芽ぐむ	二〇五
目論む	二〇七

貰う	二〇五
【や】	
休む	二〇四
闇	二〇一
夕方	二〇六
夕日	二〇〇
愉快	二〇二
雪	二〇三
許し	二〇八
酔い	二〇九
用意	二〇三
容易	二〇二
用事	二〇三
予測	二〇一
夜通し	二〇三
夜	二〇六
【ら】	
ラブレター	二〇四
乱雑	二〇五
旅館	二〇三
【わ】	
別れ	二〇六
沸く	二〇三
詫び	二〇五
笑い	二〇六
笑う	二〇六
悪口	二〇八

略語・記号表

【品詞・活用など】

(字義) 一字の漢字の

意味

- (接頭) 接頭語
- (接尾) 接尾語
- (名) 名詞
- (代) 代名詞
- (自) 自動詞
- (他) 他動詞
- (補助) 補助動詞
- (形) 形容詞
- (形動) 形容動詞
- (連体) 連体詞
- (副) 副詞
- (接) 接統詞
- (感) 感動詞
- (格助) 格助詞
- (接助) 接統助詞
- (係助) 係助詞
- (副助) 副助詞
- (終助) 終助詞
- (間助) 間投助詞
- (助動) 助動詞
- (連語) 連語

(五)

口語動詞の五
段活用

(四)

文語動詞の四
段活用

(上二)

上一段活用

(上二)

上二段活用

(下二)

下一段活用

(下二)

下二段活用

(カ変)

カ行変格活用

(サ変)

サ行変格活用

(ナ変)

ナ行変格活用

(ラ変)

ラ行変格活用

(スル)

「する」をつけ
てサ行変格活
用となる

(タ)

口語形容動詞
の活用

(ハ)

「と」がついて
副詞となり、
「たる」がつい
て連体詞とな
る

(ク)

文語形容詞の
ク活用

(シク)

文語形容詞の
シク活用

(タリ)

文語形容動詞
のタリ活用

(ナリ)

文語形容動詞
のナリ活用

自

自動詞

他

他動詞

文

文語

可能

可能動詞

【百科語など】

文学

文法

世界史

日本史

一般社会

経済

法律

地理

数学

物理

化学

天文・天球

海洋

気象・大気

地質・地球

【動】

動物

【植】

植物

【保】

保健

【医】

医学

【生】

生理学

【音】

音楽

【美】

美術

【映】

映画

【演】

演劇

【建】

建築

【服】

服装

【工】

工業

【農】

農業

【商】

商業

【水】

水産

【宗】

宗教一般

【仏】

仏教

【基】

キリスト教

【哲】

哲学・倫理

【論】

論理学

【心】

心理学

米…米語

△ 常用漢字表にない漢

○ 常用漢字表にある漢

字

【漢字につけた記号など】

〔 〕

…

…

…

…

…

…

…

…

…

…

…

字でその音・訓が掲

げられていない読み

あて字とされるもの

人名用漢字(一字漢

字での表示)

【その他】

〔方〕…方言

〔枕〕…枕詞(まくらごころ)

〔古〕…古語

〔俗〕…俗語

|| 同意の漢字

↑ 対義語・対応語

↓ 語釈がなく、他の見

出しを参照する

↓ 語釈があり、なお、

他の見出し・囲み記

事・さしえなどを参

照する

〔 〕 そのまでの語釈の

すべてにかかる対義

語・対応語を囲む

… 品詞が二つ以上

あつて意味の異なる

場合、および動詞の

自他を分ける

〔春〕〔夏〕〔秋〕〔冬〕 季語

